

# 「協働」は まちづくりの 大きな推進力

地方分権の流れが加速する中、  
市民と行政の関係が見直されています。  
まちづくりにおいても、  
従来の手法にこだわらない柔軟な考え方や、  
新しいシステムが求められています。  
中でも、お互いの役割を認識し合いながら、  
ともに協力し、ともに働く「協働」が、  
今回の総合計画を推進する上でも、  
大きなポイントとなることは確実です。  
恵庭市ではこの「協働」が、  
すでに市内各所、暮らしの各場面において、  
有効に発揮されています。  
協働の意義や必要性を一人でも多くの市民に  
実感していただくため、  
その代表的な取り組みをご紹介します。

## 【市民参加の事例】

- いこいの花畑
- わかくさマザーグース
- えにわシーニックプロジェクト
- 柏木川プロジェクト

## 仲間が集まり 700坪の花畑が 生まれた



花のまち、ガーデニングのまち  
として全国に名前が浸透して  
きた恵庭。その発祥の地と言われ  
る「恵み野地区」に、季節の花々  
を100種類以上も植えてひときわ目  
をひいている花畑があります。

それが2004年から植え込みが開始  
された、市民の自主管理による広  
さ約700坪の「いこいの花畑」です。

この土地はもともと市有地で、  
700坪というまとまった広さの土地  
を空き地のままにしておくよりも、  
花畑として活用した方が、花のま  
ち恵み野のイメージアップにつな  
がると考え、2003年秋、ボランテ  
ィア活動の一環として自主的に管  
理する花畑にしたい旨の提案を市  
民有志が市に要請しました。





# いこいの花畑

～花のまち恵庭のランドマークに～



市も、これを受けてまちづくりに貢献するものとして前向きに検討。早速、関連機関や諸団体とも協議の上、この提案を認めました。

市民有志は、市内の花苗生産者などから寄贈してもらった苗を持ち寄り、近隣住民50人の協力も得て、2004年6月に植え込み作業を行いました。その後、天候にも恵まれて花の生育が予想以上に進み、夏頃には見違えるような花畑に変身したのです。

苗の植え込みばかりでなく、白く塗られた休憩用のテーブルやイスなど、花畑の中に設置されている備品などもすべて市民有志の手づくりです。花畑のマスコットの存在となっている、花の中に羽を

休めているように見えるブリキ製の白鳥2羽も、メンバーの1人が馴染みの牧場から譲り受けた酪農用の集乳缶を利用し、細長い水道管をハンダづけして作ったもの。温もりあふれる花畑となっています。

ひとと冬越した2005年の花畑は、雪融けを待っていたかのように春先から次々と花が咲きました。春の到来をまっ先に告げるクロッカスの花が可憐な姿を見せ、次いで水仙、チューリップ、マーガレット、ルピナス、アイスランドポピー、ジャーマンアイリスなどが開花しました。

夏になると、背丈が2メートル近くもあるジギタリスをはじめ、ガウラなどが夏の陽射しの中で艶やかに

咲きました。

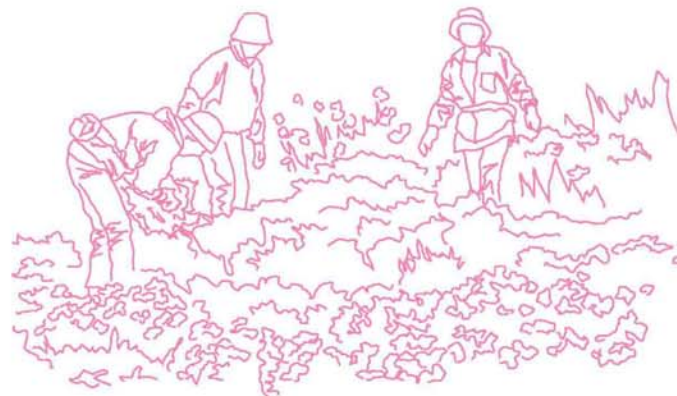
秋はコスモスを筆頭にタデやヒデンスなどの花が涼やかに風に揺れ、ホウキグサが色づく晩秋まで沿道を歩く人々の目を楽しませました。

周辺住民はもとより、通学通勤途中の市民や、用事で立ち寄った市外の人々にも、花畑は評判となっています。市民のボランティアによって維持・管理されていることを知り、資金の足しにして欲しいと寄付を申し込んでくる人も、少なくないということです。

花畑を自主管理する市民有志は、花畑のいっそうの充実を目指して、現在、様々なアイデアを練っています。例えばムラサキシキブ、フタリシズカなど、日本固有の花を植え付けようという考えもその一つ。

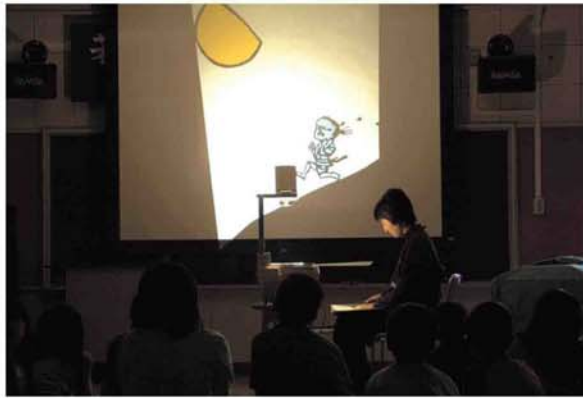
メンバーはますます意欲を燃やしており、花畑づくりに参加する仲間も、着実に広がっています。

季節を彩る花々が咲く「いこいの花畑」は、いま、花のまち恵庭の、そして恵み野のランドマークとなっています。





## 地域のお母さんたちが 子どもたちの読書環境を支えています



## わかくさまザーグース



全国に先駆けて取り組んでいる、誕生間もない赤ちゃんに絵本を贈るブックスタート事業。平成16年4月には、市内のすべての小学校図書館に専任の学校司書が配置されるなど、今、子どもたちの読書環境への取り組みが注目を集めています。

これまでにいたる道程は、決して平坦なものではありませんでしたが、子どもたちに本を読んでもらいたいと願う、お母さんたちの熱意が大きな力となりました。平成9年に、同じ若草小学校に通う9人の子どもの母親が集まり結成された「わかくさまザーグース」は、学校図書館のより良い環境づくりについて、学校と地域が連携したモデルケース的な存在として力を注いできました。

その若草小学校は、ボランティアとの連携による読書活動が認められ、平成14年度に読書活動優秀実践

校として文部科学大臣表彰を受賞。

現在、マザーグースは専任の学校司書と協力しながら、週1回、子どもたちへの読み聞かせを続けています。

当時を知るマザーグースの関係者は、「私たちの思いは、子どもたちに本の読み聞かせをしたいという単純な動機でした。ところが、学校の協力が得られ図書館に出入りしてみると、書架に並べられてた本は、破損や古いものが多くあり、整理が十分に行きとどいているとは思えませんでした。」その反面、学校の事情もわかったといいます。「学校における司書教諭の配置は、昭和28年に成立した学校図書館法で義務付けられていましたが、人的余裕や予算的なゆとりのない自治体の学校図書館は、当分の間、配置しなくても良いという猶予期間も同時に設けられ、全国のほとんどの学校は専任の司書教諭を置かないまま経過して

いた。」と、いう状況でした。

メンバーは週1回、学校図書館に出向き、本の読み聞かせやオリジナルの人形劇を行うかたわら、学校から許可を得て図書館の飾り付けや本の修理など、整備作業を行いました。同時に、学校図書館に関する情報を幅広く収集するとともに、各地で活動する同様のグループや地域の皆さんとのネットワークの輪をひろげていきました。

こうした中、平成15年から12学級以上の小中学校への司書教諭の配置が義務化しました。しかし、担任の仕事と兼務する司書教諭の負担は予想以上に大きいなど、新たな課題も浮き彫りになったことから、先進的な取り組みがなされている沖縄県の学校図書館の視察を行っています。後に恵庭市学校図書館活動推進協議会も設置され、学校図書館への専任司書配置に向けた気運は次第



に高まり、平成16年4月、ついに道内でも例のない恵庭市の英断を後押しする力の一つになりました。

また、市内小中学校すべての図書館をオンラインで結ぶ、学校図書館情報システムを稼働させるなど、学校における読書環境は飛躍的に向上。さらに、平成18年度からすべての中学校にも学校司書を配置することとしています。

**最**近、子どもたちを対象に行った読書活動アンケート調査の結果をみると、恵庭市の小学生が1か月に読む本の平均冊数は12.2冊を数え、(全国平均7.7冊)全国平均を超えています。恵庭の未来を担う子どもたちを育むためにも、地域や学校、市民が共に手をたずさえていく必要があります。

